

Adolescence personality characteristics with sentence compliment test

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okada, Tsutomu, Nagai, Thoru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001091

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



文章完成法による青年期心性についての考察

岡田 努・*永井 徹

青年期は第2の誕生なども形容されるように、社会的身体的成熟や認知的能力の完成に伴って、児童期までの自己認知や対人関係が大きく変化を蒙る時期であるとされている。青年期には様々な病理的状态や情緒的不安定が現われることも多く、青年期危機という用語が用いられてきた。しかしこの用語については人生周期の中での青年期という転換点という意味で用いる立場(Erikson, 1959; 清水・藤頼, 1976など)と、青年期特有の精神疾患を意味する立場(村瀬1984など)の間で用語上の混乱が見られてきた。長尾(1989)は両者の立場を統合して、青年期における自我発達上の課題に直面した際に生じる心理的葛藤が、個人のおかれた状況や自我の強さによっては不適応状態や精神疾患に陥りやすいものと述べ、これを「自我発達上の危機」と呼んだ。永井・岡田(1989)は中学生から大学生にかけての対人恐怖的心性の変化について調査を行い、年代が上昇するにつれて対人恐怖の傾向が強くなること、対人恐怖の傾向への自覚が自我同一性確立のための試行錯誤として意味のあることを見いだした。このことから、一般健常青年においても病理的傾向が特徴的に見られること、またこうした傾向は否定的側面のみならず自我同一性確立といった肯定的側面に寄与するものであることが示唆されている。こうした変化に対応して自己概念や他者概念にも変化が見られる。Rosenberg(1986)によれば児童期から青年期への経過の中で、自己記述の内容が社会的外的内容から心理的内的内容へと変化するという。すなわち身体的可視的なことから、思考感情願望など個人的不可視的内容へと変化するのである。また対人関係においても外的理由によるつながりから感情や評価に基づく関係が重きをおくようになるといわれている。

吉田(1991)は青年期には児童期に直接に表出していた情緒反応が表出を抑圧されるため、情緒体験が「疾風怒濤」などといわれるような激しいものとなり、むなしさ寂しさ不機嫌無愛想といった「気分」の形であらわれやすいとしている。

こうした不安定な状態においては青年は友人関係において深い情緒的関係を持つことで安定化をはかろうとすると考えられている。Blos(1962)は、青年期前期(中学生時期にほぼ相当する)における両親からの心理的離乳に伴う不安感への防衛機制として、友人との親密な関わりをもつとしている。ここでの関係は相手を自己の延長のような捉え型をしたもので、Blosはこれを「自己愛型対象選択」と呼んでいる。こうした友人関係は個人が自分で十分納得・満足して受容できる行動規範(自我理想)を獲得するにつれて見られなくなるとされている。Sullivan(1953)も青年期における友人との親密な関係を重視している。Sullivanによれば前青年期に特に特徴的に見られる、同性同年代友人との親密な関係は、それまでの個人の生育史における葛藤や精神的歪みをも修正する機能(修正感情体験)を持ち、逆にそうした関係を体験できなかった場合、将来的に重篤な精神病理をもつ可能性があるとも述べている。岩永(1991)は青年期の友人関係の特質として異性愛と同性感での親密さに類似したものがしばしば見られ、パーソナリティやアイデンティティ形成に両親以上に影響を与えるような緊密な結合が見られるという。安藤(1966)は青年期における準拠集団について検討し、多くの青年が中学生から高校生にかけて親友への準拠と同一視の比重を高め父母家族への準拠を低下させていくことを見いだしている。岡田(1984)においても中学生において友人を依存対象とする者の方が母親を依存対象として選択する者に比べ肯定的な自己像をもつことが見いだされている。

1991. 7. 1 受理

*聖セシリア女子短期大学 幼児教育学科講師

しかし一方でこうした深い緊密な友人関係が現代の青年には見られにくくなっているという意見もある。千石(1991)や栗原(1989)は現代青年の対友人関係について、互いに傷つからないために、相手のプライバシーには踏み込まず、表面的なやさしさだけで友人関係を結ぼうとしていると述べている。こうした関係は自己開示の低い人格の影響を及ぼさない関係と考えることができ、従来の青年期の友人関係での記述と異なっている。こうした傾向の中では従来のような青年期危機状態での不安定さや一時的な病理状態も現れにくくなっているとも考えられる。

個人の精神的健康さの指標としては自己評価がしばしば用いられてきた。藤原(1981)は、自尊感情ないし自己評価が高い人について“内的安定度が高く柔軟性に富み、自己をよく受容し、対人関係においても不安緊張が低く、とらわれを持つことなく他者を受容し自発性があり積極的で自己を自由に表現得る、いわゆる「十分に機能する人間」(P86)”と記し、自己評価の高さが個人の心理的健康度の指標となることを示唆している。井上(1981)；藤原(1981)は自尊感情が自我同一性形成に寄与することを示唆しているが、両者別個の議論にとどまり、2つの直接的な関連については言及されていない。Rogers&Dymond(1954)は現実自己像と理想自己像の隔たりが小さいことが精神的健康の指標となることを指摘しているが、自己評価に関する伝統的な視点では現実自己と理想自己の差が小さいほど自己評価は高い(Harter, 1983)とされおり、自己評価が健康度の指標として有効であるといえる。病理的傾向との関連では、岡田・永井(1990)は中学生と大学生で自己評価と対人恐怖の傾向に間に負の相関関係を見出している。

青年理解の方法としては、構成的な評定尺度による測定にはいくつかの批判があった。西平(1983)は、操作的定義による数量的測定によっては多くの青年期の課題として記述されていることが実証困難であるとしている。Loevingerは、評定尺度法による測定は研究者の枠組みを反映するのみであり、被験者の自由な枠組みを反映しえないとして(Loevinger&Wessler, 1970；佐々木, 1980)、実際の被験者の自我の状態を知るための質的な測定手段として文章完成法を提唱している(渡部, 1990)。Loevingerは独自の評定マニュアルによって個人の自我発達程度を測る方法を開発している。

以上のことから本研究では自己評価の高い青年

と、反対に低い青年について文章完成法検査(以下SCTと記す)において記述された反応をもとに、青年期における対人及び対自己・情緒状態についての検討を行う。但し多くの青年期理論が男子青年の発達をもとに構想され、女子青年の発達については未だ十分批判に耐えるものがない現状を考慮し、今回は男子青年のみを考察の対象とする。SCTについてはLoevingerの自我発達評定マニュアルの日本版(佐々木, 1981；渡部・山本, 1989など)も開発されているが、いずれも女子青年用として開発されたものであり、また本研究では自我発達よりもむしろ対人関係や情緒状態などを中心とした検討を行うため、改めて反応についての内容分析の上カテゴリ分類を行うものとする。更に一般青年における対人恐怖の傾向及び自我同一性確立の度合とSCTとの関連も併せて検討する。尚、自己評価及び自我同一性と対人恐怖の心性の関連については永井・岡田(1989)；岡田・永井(1990)においてすでに議論されているため、本研究ではこの部分についての検討は行わない

方 法

尺度 ①自己評価尺度 Rosenberg(1965)の邦訳版(山本・松井・山成, 1982)10項目を用いる。本尺度は個人のもつ全体的な自己評価の度合を測定するものとされており、より得点の高い者ほど自分自身を高く評価しているものと考えられる。山本他(1982)及び岡田(1987)において尺度の単一因子性及び信頼性・妥当性が確認されている。本研究では0(全くあてはまらない)―6(非常にあてはまる)の7件法によったため理論上とりうる得点範囲は0―70点となる。

②精研式文章完成法より、「心をうちあけるのは」「私の気分は」「私はよく人から」「もし生まれかわるなら」「できることなら」の5項目を用いる。これらは対人関係での重要な他者、自己の気分情緒状態、客観的な自己記述、願望に関する項目(2項目)といった内容を想定したものであり青年期における重要な発達の特徴を反映すべく設定された。しかし文章完成法といった方法が自由記述に近い反応を求めていることもあり、調査者が期待した反応内容が得られない場合もありうる。

③対人恐怖の心性に関する尺度 永井(1987)において作成された対人関係尺度42項目。本尺度は一般健常者での対人恐怖の傾向を測定する尺度で、因子

的妥当性が永井 (1987)、永井・岡田 (1987) により確認されている。以下の14項目ずつ3つの下位尺度を持つ。I「対人状況における行動の諸特徴」は集団への溶けこめなさや他者に対する気恥ずかしさについての項目からなる。II「関係的自己意識」では他者からの視線などに対する不安に関する項目からなる。III「内省的自己意識」は自分自身の劣等感や集中力の無さなどについての項目からなる。いずれもより得点の高い場合ほど対人恐怖の傾向が高いと考えられている。本研究では0(全くあてはまらない) - 6(非常にあてはまる)の7件法によったため理論上とりうる得点範囲は各下位尺度ごと0 - 84点である。

④自我同一性の確立に関する尺度 Erikson (1959) は個人の自分自身への社会的・個人的な定義づけとして自我同一性の概念を提唱し、特に青年期において同一性確立のための葛藤が大きくなるとしている。こうした自我同一性の確立の度合を測定するための尺度として、Dignan (1965) の Ego identity scale より14項目を抜粋した邦訳版(大原・渡辺・永井・中村・小川・西川・梅沢・福島, 1980)を用いる。より得点の高い者ほど自我同一性の確立の度合が高いものと考えられる。他の尺度同様の7件法によっており、理論上とりうる得点の範囲は0 - 84点である。

調査対象 神奈川県にある4年制国立大学1年次学生男子211名 授業時間内に一斉施行
調査時期 1987年3月

Table 1 対人関係尺度の項目

I 対人状況における行動の諸特徴

人が大勢いるとうまく会話の中に入ってけない。
人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。
対人関係がきこちない。
グループで付き合うのが苦手である。
大勢の中で向い合って話すのが苦手である。
仲間の中にとけこめない。
人と目が合わせられない。
グループの雰囲気になじめず違和感を感じてしまう。
人との交際が苦手である。
集団の中にとけこめない。
人前になるとオドオドしてしまう。
多人数の雰囲気になかなか溶けこめない。
人と話をするとき目をどこへ持って行って良いか分からない。
人と自然に付き合い合えない。

II 関係的自己意識

自分のことが皆に知られているような感じがして思うように振る舞えない。
他人に対して申し訳ない気持ちが強い。
人と会うときに自分の顔付きや目付きがその人に悪い影響を与えるのではないかと不安になることがある。
クラスや近所の人に、自分がどのように思われているのか気になる。
友達が自分を避けているような気がする。
自分のことが他人に知られるのではないかとよく気にする。
人と会うとき自分の顔付きが気になる。
人と話していて自分のせいで座がしらけたように感ずることがある。
相手にイヤな感じを与えるような気がして相手の顔をうかがってしまう。
自分が人にどう見られているかよくよ考えてしまう。
自分の弱点や欠点を他人に知られるのがこわい。
人の笑い声を聞くと自分の事が笑われているように思う。
他人が自分をどのように思っているのかとても不安になってしまう。
自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。

III 内省的自己意識

気持ちが安定していない。
何をやるにも集中できない。
みじめな思いをすることが多い。
すぐ自分だけが取り残されているような気分になる。
ものごとくに熱中できない。
他人のことがよく思えて自分のみじめになる。
不安が強い。
気分が沈んでしまってやりきれなくなるときがある。
根気がなく何事も長続きしない。
いつも何かについてくよくよ考えてしまう。
気持ちの動揺が激しい。
ひとつのことに集中できない。
すぐ気持ちがくじける。
何をするにも自信がない。

結 果

1. 自己評価と SCT の関連

自己評価尺度10項目をケースごとに合計し、自己評価得点とした(平均33.29, 標準偏差9.60)。この得点の第1四分位数(28.25)より下の者を低自己評価群(53名)、第3四分位数(40.14)より上の者を高自己評価群(42名)として選択し、SCT分析対象とした。SCTの各質問に対する反応を各群について分類集計した結果 Table 2 ~ 6 に示す。

Table 2 自己評価の上下からみた
SCT 反応の集計 (人数)

「心をうちあげられるのは」

自己評価	友人	いない	その他	無答	自分
上	26	4	9	2	1
下	16	14	9	9	5
計	42	18	18	11	6

$$x^2=13.971 \text{ (両側 } p=0.014)$$

Table 3 自己評価の上下からみた
SCT 反応の集計 (人数)

「私の気分は」

自己評価	悪い不安定	良い安定	その他	無答	分からない
上	11	22	4	3	2
下	29	8	7	6	3
計	40	30	11	9	5

$$x^2=15.587 \text{ (両側 } p=0.008)$$

Table 4 自己評価の上下からみた
SCT 反応の集計 (人数)

「私はよく人から」

自己評価	他者からの評価	他者の働きかけ	無答	外見的特徴	言われない
上	24	9	4	5	0
下	20	11	15	5	2
計	44	20	19	10	2

$$x^2=7.76 \text{ ns}$$

Table 5 自己評価の上下からみた
SCT 反応の集計 (人数)

「もし生まれ変わるなら」

自己評価	現状肯定	その他	異なる特性環境希求	無答	同一性否定
上	22	10	5	3	2
下	14	12	12	9	2
計	36	22	17	12	4

$$x^2=7.35 \text{ ns}$$

Table 6 自己評価の上下からみた
SCT 反応の集計 (人数)

「できることなら」

自己評価	行動	無答	その他	自己改良	なりたいたい
上	15	4	9	6	8
下	11	21	13	10	7
計	26	25	22	16	15

註 カテゴリーは高低両群の合計の頻度の高い順に表示してある
 $x^2=10.51 \text{ } P<.1$

(1)「心をうちあげるのは」の項目については打ち明ける対象について分類について分類を行った。その結果「友人・親友」「相手なし・自分自身」「その他」及び無回答に分類された。自己評価の上下×カテゴリ間で人数の比較の結果全体で $x^2=13.97$ ($p<.05$), 多重比較 (Ryan 法による一対比較) の結果友人・親友と回答した者といないと回答した者の間で $p<0.5$ で有意な差 ($x^2=6.43$) が見られた。

(2)「私の気分は」については、「悪い・不安定」反応、「よい・安定している」反応、「分からない」とする反応、その他及び無回答に分類された。自己評価の上下×カテゴリ間で全体で $x^2=15.59$ ($p<.01$) の差が見られ、多重比較の結果、安定している又は「よい」と「不安定・悪い」 ($x^2=14.52$, $p<.05$) について有意な差が見られた。

(3)「私はよく人から」については、反応の内容から「まじめといわれる」といった他者からみた自己記述の反応、「からかわれる」といった他者からの働きかけに関する反応、「××ににている・背が高いといわれる」といった外見的な記述、「何も言われない」及び無回答のカテゴリに分類された。自己評価の上下×カテゴリでの比率には有意な差は見られなかった ($x^2=7.76$)。群を合同したカテゴリ間での差においては全体で $x^2=52.42$ ($p<.01$) で有意な差が見られ、多重比較の結果「他者からの評価」が他のカテゴリすべてに対して有意に多く (対他者の働きかけ $x^2=9.92$, 対無回答 $x^2=9.92$, 対外見的特徴 $x^2=21.47$, 対何も言われない $x^2=38.35$ いずれも $p<.05$), また「何も言われない」はこの他「他者からの働きかけ」 ($x^2=14.73$, $p<.05$), 「無回答」 ($x^2=13.76$, $p<.05$) に比べて有意に小さかった。

(4)「もし生まれ変わるなら」については「人間がよい・また自分がよい・今のままがよい・男性がよい」といった現状肯定的反応、「女性(異性)になりたい」といった性同一性における拒否、「もっと強くなりました

い・金持ちになりたい」など今とは違う特性や環境を希求する反応、及びその他の反応、無回答に分類された。自己評価の上下×カテゴリでの比率には有意な差は見られず($\chi^2=7.35$)、群を合同した形でのカテゴリ間では全体で $\chi^2=31.47$ ($P<.01$)と違いが見られ、多重比較の結果、現状肯定と無回答の間($\chi^2=12.00$, $P<.05$)、同一性否定との間では現状肯定($\chi^2=25.60$, $P<.05$)、その他($\chi^2=12.46$, $P<.05$)、異なる特性や環境希求($\chi^2=8.05$, $P<.05$)の間で有意な差が見られた。

(5)「できることなら」項目について「外国へ行きたい」など「行動上の希望」の反応、「しっかりした人間になりたい」など「自己改良」を希求する反応、「金持ちになりたい」など「何かになりたい」といった反応及びその他、無回答に分類された。本項目については自己評価の上下×カテゴリでの比率($\chi^2=10.51$)についてもカテゴリ間での頻度($\chi^2=4.94$)についても有意な差は見られなかった。

2. 対人関係尺度と SCT との関係

SCTの「心をうちあげられるのは」で記述された対象×自己評価の上下それぞれについて、対人関係尺度の各下位尺度での合成得点の平均値を求め(Table 7)、対象×自己評価上下の2要因の分散分析を下位尺度ごとに行った。その結果、「対人状況における行動の諸特徴」では、交互作用について $F=3.22$ ($p<.05$)と有意になった。多重比較の結果、自己評価上位群では殆どの対象について下位群に比べ低い値を示すが「いない・自分」と反応した者のみ下位群同様高い値を示すことが見いだされた。「関

係自己意識」では自己評価上下の主効果についてのみ有意($F=69.32$, $p<.01$)となった。「内省的自己意識」については対象別($F=2.91$, $P<.01$)及び自己評価の上下($F=77.59$, $P<.01$)の各主効果で有意となった。対象についての多重比較の結果、「友人・親友」よりも「いない・自分」が $F=2.38$ ($p<.01$)で傾向として高い値を示すことが分かった。

3. 自我同一性と SCT との関係

対人関係尺度同様、自己評価の自己評価×「心をうちあげられるのは」の反応によって平均値を求め(Table 7)分散分析を行った。その結果対象の主効果で $F=2.99$ ($p<.05$)、自己評価の主効果で $F=39.177$ ($p<.01$)が得られた。このことから自己評価の高い者ほど自我同一性得点が高いことが分かった。また対象の要因については Scheffe 法による多重比較の結果「友人・親友」の方が「いない・自分」に比べ有意に高い値($F=2.95$, $p<.05$)となることが見いだされた。

考 察

1. 自己評価と SCT

重要な他者(significant others)についての記述である「心をうちあげられるのは」に関しては、上位群の方が友人を心を打ち明ける対象とする者が多いといえる結果を得た。また情緒状態についての項目である「私の気分」では自己評価上位群の方が「安定」または「良好」と反応し下位群では「不安定、不良」を示す者が多いことが見いだされた。このこ

Table 7 SCTで「心をうちあげるのは」に対しての反応ごとでの対人関係尺度及び自我同一性得点の平均(上段)とSD(下段)

対象/自己評価	対人状況における 行動の諸特徴		関係的自己意識		内省的自己意識		自我同一性		
	上位	下位	上位	下位	上位	下位	上位	下位	
友人・親友	25.000	t=3.12**	40.563	24.000	49.250	21.269	46.563	51.077	39.625
	15.382		15.449	12.296	9.327	10.329	6.831	7.408	5.097
	F=3.57*								
ない・自分	50.200	t=0.89	51.056	34.400	49.611	38.200	51.222	41.600	36.278
	21.277		18.325	15.274	15.834	10.354	16.615	8.877	7.094
	F=3.46*								
その他	21.889	t=5.38**	56.000	22.667	51.667	20.556	46.444	48.000	38.111
	12.985		13.910	12.698	12.114	9.329	12.063	4.153	9.185
無回答	29.500	t=2.46*	53.556	27.500	43.556	24.500	44.556	45.000	39.333
	3.536		13.230	2.121	9.838	10.607	10.163	8.485	3.000

註：対象間の多重比較は Scheffe 法によった

*: $p<.05$, **: $p<.01$

とから自己評価の高い青年の方が、友人に対して深い関わりを持ち、情緒的にも安定していると感じており、精神的に問題の少ない状態といえる。

他者から見た客観的自己記述(「私はよく人から」)については自己評価の上下間でのカテゴリ頻度に差は見られなかったが、外見的特徴よりも他者からの評価や具体的な対人関係(働きかけ)に関する記述が多く見られた。これはRosenberg(1986)が指摘するように児童期から青年期における対人場面および自己への認知的変化が反映されたものと考えられる。

非現実的願望に関する項目である「もし生まれ変わるなら」についても自己評価の上下での違いはみられなかった。(尚、統計的には有意とはならなかったが、『現状肯定』が上位群に多く『異なる特性環境希求』が下位群に多い傾向が見られ、自己評価の高い者ほど現在の自分の環境を受容的に捉えているといえる。こうしたことはRogers(1963)のいう十分に機能している人間とも考えられる反面、現状に受身的に満足してしまうといわれる現代青年の特徴を反映しているともうけとれる)。

同じく願望についての項目である「できることなら」については、自己評価上下間でも、またカテゴリ間においても有意な差はみられなかった。尚下位群では「転部・転科したい」という反応が2例ほどみられたが上位群では皆無であり、ここでも自己評価と現状への肯定受容が関連づけられる。また上位群では「金持ちになりたい」という反応が目立ち、金銭的な価値が重視される現代のわが国の社会情勢が、特に健康度の高い群に大きく反映されている。

2. 選択対象と対人恐怖的心性との関連

「I 対人状況における行動の諸特徴」においては、心を打ち明ける重要な他者を認めない者は一樣に高い不安を示している。本尺度は、自己から他者に働きかけて関係を結ぶ場面での全般的な不安感を示しており、心をうちあける対象のない者がこうした不安感が高いのは妥当なことといえよう。

しかし他者から自己への働きかけや感情に関する不安感を示す「II 関係的自己意識」に関してはこうした対象選択による差が明確にならなかった。また自分自身に対しての情緒の不安定性を測定する「III 内省的自己意識」ではやはり「心をうちあけられる」対象をいなしとした者が高い不安感を示しており、重要な他者を持たない青年の問題性が現れている。以上のように「重要な他者」の有無は関係的

自己意識に示されるような他者からの評価への認知よりも、自分自身の行動や情緒と結びついていると言えよう。

3. 自我同一性について

自我同一性得点については、自己評価と同一の方向を持つことが確認され、井上(1981)の指摘と一致する結果が得られた。また「心をうちあける対象がない」とした者がとりわけ低い得点を示していたことから、青年期における重要な他者の存在が自我同一性確立に関して重要な役割を果たすことが見いだされた。

全体的考察

以上の結果から、自己評価上位群の方が重要な他者の存在や情緒状態などで安定を見せ、より精神的に健康な状態にあることが追認された。岡田・永井(1990)において指摘されるように大学生においては自己評価が高い青年ほど対人恐怖の傾向が小さい関係にあることからみても、自己評価の高い青年が対人関係において円滑に持っていることが示唆される。しかしこうした青年が、実は危機を経ず健康な状態を維持したまま青年期を経る、いわゆる早期完了型(foreclosure)青年ではないかとの疑問も生じる。Marcia(1966)によれば、早期完了型青年は危機を経験しない反面自己へのコミットメントの表明はあり、不安が低く権威主義的であるなどの特徴を持つとされている(杉原, 1988)。病理的な傾向という意味での青年期危機概念からすれば、本研究における自己評価上位群も青年期における自我発達課題を回避した形で一見健康な状態を維持している群と考えることもできる。また千石(1991)は現代青年の対人関係の特徴として、「お互いに心をうちあけあう」といった友人関係に肯定しながらも、互いのプライバシーに立ち入ることを避け甘えすぎず自分を犠牲にしない、いわば表面的な関係での「うちあけあう」という傾向が見られるとしている。本研究におけるSCTへの反応もこれと同様の傾向が示されていた場合、「心をうちあけられるのは友人」という反応が必ずしも深い友人関係を指すとは言えない可能性も出てくる。こうした青年は他者との葛藤が少ない分他者からの評価が低下することも少なく、自己評価を高く維持しやすいとも考えられる。しかし青年期の自我発達の危機や自我同一性混乱は高校生期に最大に達し以後漸減するという指摘や(松田・広瀬, 1982; 長尾1989)、高校生では自己評

価の上下に関わらず高い対人恐怖傾向を示すが、大学生においては自己評価の低い群程高い病理性を示している(岡田・永井, 1990)といった点, また自己評価上位群がより高い自我同一性得点を示したことからみても, 彼らがすでに危機状態を脱し自我同一性を確立した安定群とみる方が妥当と考えられる。

次に, 重要な他者との関連については, 「心をうちあける」相手がいないとする青年において一貫して高い対人恐怖の傾向や低い自我同一性がみられた。彼らは「対象がいない」ことを明記できる点からみてある程度対人拒否的な面を持つと考えられる。青年期の初期段階(大学生以前)において重要な他者との関係を形成できなかった者が, それを大学生期にまで持ち越した場合, 対人関係や自我状態の全般的な不具合となって現れている可能性が示唆される。しかしこれらは「いない」と答えた者の相対的な不健康さによるものであり, 「友人」を選択した者が取りわけ良好な結果を示したとはいえない。よって, 友人との緊密な関係が自我発達に寄与するというよりは, 対人関係の拒否による問題が大きな影響をもつと考えられる。

引用文献

- 安藤延男 1966 青年期における準拠集団の推移
心理学研究 37, 219-226
- Blos, P. 1962 *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
- Dignan, M. H. 1965 Ego identity maternal identification. *Journal of personality and social psychology* 1, 476-483.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳 1973 自我同一性 誠信書房)
- 藤原正博 1981 「自我同一性と自尊感情の関係」
遠藤辰雄編 ナカニシヤ出版 アイデンティティの心理学 Pp85-89
- Harter, S. 1983 *Developmental perspectives on the self-system*. In Mussen, P. H. (ed) *Handbook of child psychology vol.4 (4th edition)*
- 岩永 誠 1991 「友人・異性との関係」今泉信人・南博文 人生周期の中の青年心理学 北大路書房 Pp140-152
- 栗原彬 1989 やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェイス— 新曜社
- Loevinger, J. & Wessler, R. 1970 *Measuring ego development* 1. Jopssey-Bass: San Francisco.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of personality and social psychology*, 3, 551-558.
- 松井君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, 30, 157-161.
- 無藤清子 1979 「自我同一性」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-185.
- 村瀬孝雄 1984 青年期危機説への反証 精神科MOOK 6, Pp30-36 金原出版
- 永井徹 1987 対人恐怖の心性に関する心理学的研究 東京都立大学人文科学研究科博士論文(未刊)
- 永井徹・岡田努 1987 対人恐怖の心性の構造に関する研究 日本心理学会第51回大会発表論文集, 534
- 永井徹・岡田努 1989 青年期における対人恐怖の心性に関する研究 日本心理学会第53回大会発表論文集19
- 長尾博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度作成の試み 教育心理学研究 37, 71-77
- 西平直喜 1983 青年心理学方法論 有斐閣
- 岡田努 1984 思春期の自己概念—中学生期を中心として— 日本心理学会第48回大会発表論文集 623
- 岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60, 386-389
- 大原薫・渡辺寛美・永井徹・中村延江・小川捷之・西川泰夫・梅沢有美子・福島章 1980 投影法からみた中学生の心理特性その1—調査対象の基礎的特性と自我同一性尺度— 日本心理学会第44回大会発表論文集 538
- Rogers, C.R. and Dymond, R (eds) 1954 *Psychotherapy and personality change*. (友田不二雄編訳 1967 パースナリティの変化 ロジャース全集 13 岩崎学術出版)
- Rogers, C.R. 1963 *The concept of the fully functioning person*. *Psychotherapy: theory, research and practice*. 1, 1 (村上正治編訳 1967 「人間論」ロジャース全集12 岩崎学術出版)
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Universities Press.
- Rosenberg, M. 1986 *Self-concept from middle childhood through adolescence*. In Suls, J., Greenwalt, Anthony G. (ed) *Psychological perspectives on*

- the self vol 3 Lawrence Elbaum, London Pp107-136.
- 佐々木政宏 1980 Loevingerの自我発達測定手法とそれに基づく最近の研究 心理学評論 23,392-414.
- 佐々木政宏 1981 SCTによる女子青年の自我発達の測定 教育心理学研究, 29, 147-151.
- 千石保 1991 「まじめ」の崩壊 サイマル出版会
- 清水将之・藤頼和寛 1976 青年期危機について(その1) 精神医学 18,145-152.
- 杉原保史 1988 自我同一性地位における早期完了型について 一事例に基づく考察 心理臨床学研究 5,33-42
- Sullivan, H.S. 1953 The interpersonal theory of psychoanalysis. Norton : New York.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 吉田直樹 1991 「感情の発達」今泉信人・南博白文 人生周期の中の青年心理学 北大路書房 Pp61-72
- 渡部雅之・山本里花 1989 文章完成法による自我発達検査の作成—LoevingerのWU-SCTの翻訳とその簡易化— 教育心理学研究, 37, 256-292.
- 渡部雅之 1990 WY-SCT女性版の併存的妥当性の検討 滋賀大学教育学部紀要 40, 87-95.